

地方主義への献身 ― 1930年代におけるドナルド・デイヴィッドソンの保守思想の展開

香ノ木 隆臣

1.

南部農本主義者のなかでも特に戦闘的な論陣を張った Donald Davidson (1893-1968) は、生涯にわたり南部を擁護する立場を変えず、とくに1950年代にはセグリゲーションの主張を堂々と展開し、人種差別主義者というマイナスの印象を我々に残している存在である。事実、1930年代終わりのエッセイには、ジェファソンの農本主義¹という理想の価値観の復興に向けて、人種の隔離を積極的に提言するに至った姿²をうかがうことができる。12人の南部農本主義者による1930年刊行の宣言集 *I'll Take My Stand* の諸論文は、南部というトポスを基にした思想を展開しながらも、その主張の方向は必ずしも統一されたものではないゆるやかなものであったが、デイヴィッドソンは最終的にいわばもっとも極右の方向に振れた人物になったといえる。南部農本主義の仇敵は、よく知られるように北部インダストリアリズムであった。デイヴィッドソンは1920年代半ばになると、北部的価値観がアメリカ全体を覆い尽くそうとする状況を真剣に危惧し始め、この宣言集の下地となる論文を作り始めている。彼は、早くから機械文明の跋扈を苦々しく見ており、1929年のニューヨーク株式大暴落に始まる1930年代の大不況を、自分のヴィジョンの正しさを客観的に証明したものであるかのようにとらえている。元は詩作を試みていたデイヴィッドソンは、1930年代になると詩作をやめて積極的に社会批評のエッセイを書くようになり、旧南部の農本主義という価値観の復権を繰り返し訴えていたのである。

デイヴィッドソンの思想を、反時代的、反動的な時代錯誤の保守主義者の妄言と片づけるのは簡単であるが、現在から振り返ってみると、彼の発言には、画一化を否定して個人や地域社会の再生を真剣に同時代のアメリカに訴えかけていた要素があったことも事実である。インダストリアリズムの失敗として大恐慌にあったアメリカを攻撃したのは、ラディカルな左翼思想に共鳴したニューヨーク知識人や、ニューヒューマニズムの学者たちだけではなかった。しか

し、南部農本主義者は北部インダストリアリズムのみならず、共産主義思想やニューヒューマニズムをも敵視した。言い方を変えれば、農業国家設立の理想を掲げた第3代大統領 Thomas Jefferson の思想を拠り所にした南部農本主義者たちは、自分たちこそが真のアメリカ精神を体現する存在であると自負していたとも言えるのではないか。1930年代という危機の時代にこそ、アメリカ的価値観の再検討という言説が南部農本主義者を通してあらわになったのである。

この小論では、主に1930年代のデイヴィッドソンの思想の展開を跡づけ、彼が南部を擁護しながら、地方性という概念を基礎にしてアメリカ全土におけるその地方独自の本来の価値観の回復が彼の意図であったことを示したい。終生にわたり農本主義を信奉しセグリゲーションの立場を明確にしたことで現在も非難の対象となっているデイヴィッドソンの南部観は、1930年代にひとつの大きな思想上の共同体を形成した南部農本主義というイデオロギーの特徴と限界をもっともよく伝えているものとして、再検討に値するものである。

2.

デイヴィッドソンは旧南部の価値観に固執した、生涯にわたる南部農本主義者というイメージで受けとめられることが多いようであるが、彼は貧困にあえぐ1930年代の南部の現実を意外なほど冷静に見据えて将来への理想を語り続けていた。ニューヨーク株式市場大暴落の前年1928年の論“*First Fruits of Dayton: The Intellectual Evolution in Dixie*”では、進化論教育が違法とされた1925年テネシー州デイトンでの「スコープス裁判」に関して、北部を代表する批評家 H. L. Mencken から「南部の後進性」が嘲笑の対象とされた一件が契機になって、南部の独自性を確信したことをデイヴィッドソンは宣言している。この論文からは、裁判の結果について拘泥することなく、この事件によってかえって南部という地域の独自性がアメリカ全体においてクローズアップされ、これを絶好の機として南部の将来に真剣な提言を行おうとするデイヴィッドソンの姿をうかがうことができる。彼はこの論文の“*Whither Progress?*”と題したセクションで、これからの南部の進む方向を語るうえでふたつの軸を打ち出している。これらの点は、『我が立場』に具体化することになる。

あらゆることの核になっているふたつの原理は次のようなものだ。第一に、今日の南部の知的な大問題は、指導者たちを見出し彼らに従うことである。第二に、地方の個人と南部のほんとうの特質とを確固たる存在とし破壊しない、そうした進歩のみが理想として正しいとされるのだ。

その指導者たちは南部自体から出てこなければならない。「外部」からではだめだ。私はあの北部からの批判をおおいに危惧するものである。
(Bingham 43)

この発言はともすればファシズムを誘発しかねないものであるが、事実として Huey Long のような人物の出現をみたものの、デイヴィッドソンにとっての恐怖は、北部インダストリアルイズムによる南部も含めたアメリカ全土の画一化に他ならなかった。“The New South and the Old” という最後のセクションで彼は、「寛容なる調和」という言葉で地方の独自性を尊重する政治を求め、南部にとっての進歩を具体的に説いている。

要するに、南部の進歩は当然のことながら有機的でなければならない。それがほんとうの意味で進歩となるのは、まさに南部が成長したときにおいてのみである。そして成長とは民衆の持つ財が改善されたことを意味するのであって、単なる付け足しや変化のことではない。ゆえに進歩に向けての始めの一步は、南部が自身に向き合い、自身を再発見し、その理想を検証し、現在に鑑みて過去を、過去に鑑みて現在を評価することなのである。(Bingham 49)

デイヴィッドソンは南北戦争前の旧南部を単純に理想化して現実を否定しているのではないのは重要である。彼は将来の南部も南部独自の価値観に基づいた進歩を果たすことを訴えている。ラディカルな左寄りの改革でもなければ、北部的インダストリアルイズムとも違う、南部の伝統を彼は根拠にしていたのである。そして、アメリカの真の伝統はトマス・ジェファソンの農本主義思想が生きている南部にこそ存在すると、1929年以降の大恐慌時代にあつてデイヴィッドソンは確信したと思われる。農業に基礎をおく社会のみが、牧歌的な中世ヨーロッパを、さらには歴史的記憶を超えた「人類経験の生命力に満ちた大いなる連続性」(Malvasi 158-59)を実現させることができると彼は昂揚感を露わにしている。

1930年出版の『我が立場』に収められたエッセイ“A Mirror for Artists”では、南部と農本主義の結びつきを「アメリカでは、過去も現在も南部が農本主義社会の生きた実例を有しており、それを保持していくのは、危機の時代にある人間がなしうるもっとも英雄的努力である」(Twelve Southerners 30)と語って南部イコール農本主義の図式を初めて明確にしている。これを原点にデイヴィッドソンは1930年代にわたりインダストリアルイズム批判の急先鋒になって、

多数の評論を執筆する。「民主主義はインダストリアリズムと手を組んで初めて、ほんとうに危険なものになると考えられる。それはアメリカで民主主義が政治的にも社会的にも無能になるときでもある。あるいは、ソヴィエトの極端な民主主義についても同様である。ソヴィエトでは、階級という制限のなかでの平等主義に変えられてしまった場合、インダストリアリズムは人間性の存在を脅かすものとなる。」(Twelve Southerners 49) という一節には、インダストリアリズムを軸に、アメリカ北部とソヴィエトの双方を攻撃の対象とした南部農本主義者の戦闘的姿勢が明らかである。インダストリアリズムも共産主義も共に、個々人を抑圧し人間性を奪うものに他ならないと彼は考えているからである。この論文の最後で、彼は個人という存在がすべての基盤になっていることを明示する。

芸術家は、こうした時代にあっては個人と芸術家のふたつの役割を果たさなければならないことを忘れてはならない。これらのうち、個人としての役割の方がいっそう喫緊の重要性をもっている。芸術家としての彼は全力を尽くして、我々の時代の汚れから身をおとし、芸術における脱中心化を支持し、商業的分量で売りさばかれあるいは尊い聖地に隔離して崇められる奢侈品としての芸術といった誤った福音に、全細胞の力で抵抗するであろう。しかし、彼は芸術家として止まり木にとまっていたら、この闘いを遂行することはできない。彼は何よりもまず個人でなければならない。たとえしばしのあいだ自分が芸術家としての力を削がれることがあるにしても、彼は皆と同じ場に出て、市民とならなければならないのだ。(Twelve Southerners 60)

農本主義に拠って立つ、インダストリアリズムに抵抗する芸術家といえども、芸術至上主義的立場に惑溺することは許されず、ひとりのアメリカ市民として生きることがもっとも大切であると説くデイヴィッドソンのこの発言は、大地を耕す農民に個人の美德の結晶をみて工業化を嫌悪したジェファソンの価値観を直接に反映している。画一化、全体主義に対して抵抗する主張を、早くも1930年までにはデイヴィッドソンは前面に打ち出していたのである。デイヴィッドソン自身は直接かかわらなかつたとはいえ、南部農本主義を源流とする批評ニュークリティシズムが、個人の感性の陶冶を目指す現実的な性格をもっていた理由を示す証拠となる発言とも言うことができるだろう。

3.

不況が深刻化した 1933 年のエッセイ “Sectionalism in the United States” になると、デイヴィッドソンの舌鋒はいつそう鋭さを増し、南部という地域の独自性を前面に押し出すようになる。別の言い方をすれば、彼はいったん個人を中心にした思考を展開していたが、そもそも個人とは社会全体にあまねく存在するわけであり、その意味で画一化に墮する危険性を免れないと悟ったのであろう。南部農本主義を研究する Paul V. Murphy によれば、デイヴィッドソンは 1933 年初めにはアメリカで地域という感覚がよみがえりつつあることを実感し、南部人が南部の歴史を把握するためにはモダニズムとそれがもたらした誤った個人主義を拒絶しなければならないと考えていたのであった (Murphy 99)。デイヴィッドソンは、1932 年に没した Frederick Jackson Turner のセクショナリズムの理論を援用しながら、アメリカ史における地域の重要性を改めて強調し、アメリカは世界でも例外的な、異なった地域色のゆるやかな連合体であるという大前提をここで述べている (Bingham 53)。南部は農本主義を保ってきたゆえにかえって、インダストリアリズムがもたらした大不況下では新たな利点があるはず (Bingham 69)、と説いているのは彼として当然にしても、このエッセイでは、大恐慌が急速に北部的価値観で画一化しつつあったアメリカをうまく分断する役割を果たしたという趣旨の発言をしているのは非常に興味深い。これは皮肉なのか本音なのか判断できかねるが、いずれにしても国家的危機からアメリカを救い、これを機にそれぞれの地方が本来の地方色という価値観を取り戻す重要性を語るデイヴィッドソンの姿が明らかである。

我々は完全なるナショナリズムを求めて長い間とまどいそして裏切られてきたが、アメリカ合衆国の市民—「アメリカ」とはいまだにあいまいな単語だ—を意味する適切な言葉など存在しないことが、ようやくわかってきたのだ。我々のもっとも特徴的な国民の歌は地域の経験を記録したものである。我々の文学、建築、民話、歴史、アクセントは、国家としての複合体を地域という複数の実体へと解体しているのだ。(中略) インダストリアリズムによる変革は、かつては我々を縛りつけて強制的に単一体にまとめあげると脅したのだが、今やその力を失い、得られたものは失われたものへと姿を変えたのである。脱中心化がやってきたのだ。(Bingham 73)

この論文の終わりで、「私たちには、南部人、ヤンキー、北部の白人、西部人、ニューイングランド人などなどがあるが、抽象的な制度が明らかにするよりもさらにゆるやかに結びつけられた存在である」(Bingham 74)と述べているよう

に、デイヴィッドソンはあくまでもセクションとしてのまとまりを尊重し、南部の価値観をアメリカ全体に拡大させようとまでは述べていない。彼は南部という地方の独自色を守ろうとするのに熱心であったのである。

南部農本主義者たちの攻撃の対象は、共産主義と同時に北部的インダストリアルイズムであったが、その影響を受けた南部のリベラリストをデイヴィッドソンは“Dilemma of the Southern Liberals”という論文で攻撃する。ここでの論調も先の論文と同じく、大恐慌がかえって南部的価値観の優位を明らかにしたというものである。

外から見ているとリベラル側は1930年までに勝利を収めていた。しかし、経済危機がすぐさま彼らの地位の脆弱さを暴いたのである。すべての運動は外部からやってきたものだったのだ。それは始めから、南部社会の現実組織と内的感情に自分自身を重ねることに悲しいまでに失敗していた。リベラリストたちが独立した党派として人々の前に現れたことは一度としてなく、離れたところから、南部の生活に重ね合わせたいと望んだしきたりのなかに彼ら自身の活動を入れ込んだのである。公的な、私的な出所の金に、彼らはほとんどすべてを負っていたのであった。(Bingham 85)

そして最終的に南部のリベラリストが彼の地で生き残るには、折しも産業資本主義の崩壊で逆に活性化した南部の伝統的文明、すなわち農本主義にいかにか自己を同化させるかにかかっていると論を終えている。ここから分かるように、デイヴィッドソンはますます北部的価値観への対決姿勢を強固なものにしていったのであった。

デイヴィッドソンの反動的主張は、“A Sociologist in Eden”という1936年の論文でひとつの頂点に達する。この論文で彼は、かつて暮らしたことがあるジョージア州メイコン郡を具体例にして、いかに同時代のニューディール政策が南部を損なってしまったかを、皮肉な筆致で説いている。このタイトルは、「楽園のなかの蛇」のモチーフをもじってつけられたものである。政府の御用学者が旧南部的制度を保っていた町に闖入し、いかにその後進性や奴隷制に基づく搾取の実態を暴き立てたかをデイヴィッドソンは滔々と語る。この論文の始まりはまさに牧歌的な農園の様子である。このような状況を1930年代のなかに保っていること自体の素晴らしさを語り、彼は人種差別の認識を交えつつ、南部的価値観の絶対的優位への信仰を明らかにしている。

私が思うに、南部の一般的な見方としては、農民を真に助ける農本主義

的改革はすべて、黒人の小作人を助けることにもなるというものである。小作人は助けを必要としているのは誰もが知っている。良識ある人なら皆わかることだが、農本主義的改革は、地域や地方性という特殊条件にしかるべき配慮をもってなされなければならない。

このような方策は、その地に内在する腐敗ゆえに崩壊しかかっているメイコン郡では、農園とは意味のない時代錯誤的存在であるなどといった前提によっていては、始まりようもない。(中略)しかし、ここメイコン郡では、同じような一般的な性格をもつ地域と同じように、農園は単独で生命力を保っているのを見せつけている。農業がひどい機能不全の時期をいくつも経験してさえも、農園が生き残っているというまさにこの事実は、社会科学者をして、農園とは特にこの地方の状況に適応しているわけではないという疑いをもたせるだろう。それゆえ、小作制度を規制して農地保有制をさらに広げることで農業の機能不全をただすという広く知られた必要性の注目すべき例外的事例に、農園制度がなりえないという思いを、彼らに抱かせるに違いない。(Bingham 122-23)

小作人解放という土地所有制度の根本的転換を、真正面から否定するデイヴィッドソンの発言は、まさに旧南部の農園の正当性を 1936 年という時代において擁護する、現在の視点からすれば驚くべき保守反動的な態度の表出に他ならない。ここにうかがわれるセグリゲーションの思想は、デイヴィッドソンの思考の重大な欠陥を物語っている。しかし、彼の主張は、ニューディールの TVA に代表されるような北部による南部の土地改造計画に対する、現地の側からの重大な異議申し立ての実例といえる。

「エデンのなかの社会学者」と同じ年に出版された『我が立場』の続編というべき論集 *Who Owns America? A New Declaration of Independence* (1936) に寄せた論文 “That This Nation May Endure: The Need for Political Regionalism” では、デイヴィッドソンは画一化の典型例として TVA を連邦政府の一方的な政策によると批判して、繰り返してセクショナリズムの重要性を説いている。「何が問題かを明らかにするためには、何よりもまず、地方による差異とは、社会的かつ経済的な事実なのであって、詩的虚構ではないことを自覚する必要がある。」(Agar 152) と述べた後、地方という差異の存在のもつ意義を彼は力説する。

地方という多様性は国民の生活を貧しくするというよりも豊かにする。地方がただ単に存在していることが問題となるとはいえない。むしろ、そ

の違いのなかに国としての強みがあり、さまざまな魅力だけでなく柔軟性や知識を授けてくれるに違いない、多くの視点の相互作用を与えてくれるのだから。(Agar 153)

彼にとって、セクショナリズムという地方の独自性を維持するためには、その地方に固有の伝統が不可欠であったのだ。逆に、中央の連邦政府の一方的な論理による TVA がデイヴィッドソンによる非難的となるのは当然というべきだろう。「現状では、TVA とは計画的かつ機能的な社会を、合衆国でももっとも完全なる民主主義的地方の真ん中のひとつに、無責任に投影したものである。ゆえに、正しい地方主義への探求にあえて TVA が私たちを導くことはない」(Agar 164)。マーフィによれば、デイヴィッドソンにとって TVA とは、農業の効率化につながったとはいえ、南部へのインダストリアリズムによる侵略の極致であり、河川の流れをダムにより大きく変えたことによって引き起こされた、農村という地方共同体の強制移転とその後の水没に象徴される、南部農本主義的風景の消滅、ひいては南部社会総体を否定する暴挙に他ならなかった(Murphy 111-12)。論文の最後は、再び南北戦争を起こそうとでもするような戦闘的言辭で締めくくられている。

もし地方が、あまりに抑圧され嘆願も許されず、優れた忠誠心を要求されることで不愉快に感じる事があれば、地方主義者は、古くからの標語である独立を考えることだろう。独立とは、まさにその言葉は植民地主義の終焉を意味するものであるから、アメリカ史において神聖な単語である。独立とは土地と地方はそこに住む人々に属するものであり、その人々自身が同意することによってのみ、人々は統治されるものに他ならないからだ。(Agar 176)

繰り返しになってしまうが、デイヴィッドソンは南部の価値観でアメリカ全土を統一するのを目指したのではなく、「多様のなかの統一」の実現で各セクションの独自性を取り戻すことを理想としていたのである。

しかし、『アメリカを支配するのは誰か』の刊行の頃には、すでに南部農本主義運動は瓦解していたという(註 Conkin 127-29, Winchell 167)。かつての盟友たちは南部農本主義から離れて、John Crowe Ransom は詩作に、Allen Tate は宗教的思想に、Robert Penn Warren は北部に移住し南部的価値観を基礎にした汎アメリカ的立場から著述をするに至った³。もちろん彼らの基盤にあったのは南部的心性であったとはいえ、南部農本主義の非現実性、戦闘性、抽象性

に見切りをつけたのである。デイヴィッドソンがひとり農本主義を固守し、やがて第二次世界大戦の頃からは、白人中心の旧南部的田園風景を保つために「分離すれども平等」の人種隔離政策が不可欠であるという思想を明らかにするようになった (Conkin 15-55)。この差別性については論を俟たないが、彼の主張にうかがわれる否定的要素は、南部農本主義の抱えていた根本的欠陥そのものであり、逆に、彼の思想を検討することで南部農本主義の欠陥を知ることができるといえるだろう。

4.

南部は農本主義を武器として北部インダストリアリズムの侵食と闘うという構図にデイヴィッドソンが固執したのは、彼が生粋のジェファソン主義の信奉者であったからである。そもそもなぜ彼が北部を激しく嫌悪し、南部擁護のためジェファソン主義に傾倒するようになったかについては、デイヴィッドソンが代々テネシー州に続く家系の出身であることに加え、彼の伝記を書いたマーク・ウィンチェルによれば、第一次世界大戦に従軍しヨーロッパから戻った後で北部の官庁で屈辱的な扱いを受けたという些細な経験が北部を嫌うようになった一つの原因であろうと推測している (Winchell 48)。そして、実際の戦闘体験の場で重火器に接する機会もあったらしく、デイヴィッドソンにとってそうした経験が「機械」のもつ負の側面に思いを致す契機になったのかもしれない。さらに、より一般的な時代の時流が南部にとってマイナスに作用しているという認識を彼がもっていたことは、疑うべくもない。彼は論文“Expedients vs. Principles: Cross-Purposes in the South”で、「我々は1914年までにはヨーロッパ的体制に深く取り込まれてしまっていたため、ジェファソンが恐れていたことが現実になってしまったのである。」 (Davidson 335) という認識を示したうえで、「1917年に、我々は比較的安易に [第一次]世界大戦でイギリス、フランス、ロシア側に引き入れられてしまった。いま、歴史が繰り返されようとしているとはっきり示す証拠がある。」 (Davidson 335) という危機意識を述べている。南北戦争後の北部が支配したアメリカ政府は第一次世界大戦に参戦を決め、結局は戦争という大義のもとアメリカのヨーロッパ化という画一化を招いたと考えるデイヴィッドソンにとって、1930年代の大不況の対策として打ち出されたニューディール政策は、北部の一方的な論理による再度の南部の支配という、悪しき画一化の典型的事例そのものであったのである。さらにデイヴィッドソンはこの論文で、「フーヴァー政権あるいはローズヴェルト政権から発せられたものであろうが、南部人は『危機への法的措置』への不信をもって

いるだろうか？」とニューディール政策の有効性に疑問を投げかけ、さらに、南部がおかれている服従的立場を、北部との対立のイメージを前面に押し出しながら読者に訴えかける。

社会計画は現在の体制に対する反対意見に対して開かれているだろうか、つまり、アメリカの現在の状況では、社会計画それ自体が、一地域や階級という寡頭政治の手に落ちてしまいかねない。その体制に携わる者は、アウグストゥスが議会制という虚構を維持したように民主主義という虚構を維持しつつ、限定された利益のために政治というものを役立てようとするかもしれない。産業主義が限りなく広がり独占的で搾取的な性質をもち続ける限り、農業が産業と「均衡を保つ」ことなどありえるだろうか。南部が国家の政策を決する権利を分かちあわない、あるいは南部が単なる属国としての権利しかもてず、政治の変遷や変わりゆくつかのまの流行に翻弄されている限り、「国益」などというものはありえるだろうか。(Davidson 337)

そして、この発言の後で、「かつて南部は政治家の母体であって、南部は議論に負けたかもしれないが、南部の自尊心を保ち続けたのだ。」(Davidson 337)とも述べるデイヴィッドソンは、トマス・ジェファソンの姿を思い描いていたはずである。

デイヴィッドソンは幼い時に南北戦争の話を祖父母から聞かされて育ち、後に1933年4月にジョージア州で農本主義者たちの集まりに招かれた帰りに立ち寄った南軍兵士の墓地で、血まみれの戦死者たちの姿を幻視する神秘的な体験を経て、南部のために積極的な発言をする意思を強くしたようである (Malvasi 155)。1930年代になって不況対策の公共事業という名のもとに南部が北部インダストリアリズムに侵略されていると考えるデイヴィッドソンは、アメリカがヨーロッパ化した過去を苦々しく振り返りながら、それぞれを南部と北部の二項対立に置き換えて、伝統に根差したジェファソンの農本主義を現在の南部によみがえらせて北部に再び対抗するという大きな流れを作り出そうとする意図があったように思われる。既にジェファソンが20世紀前半のアメリカの概況を見抜いてそのジレンマを回避するのを望んでいたとデイヴィッドソンは語り、本来の理想的国家形態である農業国家に資本主義的要素がその当時から巢食っていたことを指摘して、建国後と一九三〇年代現在の状況が平行関係にあることをデイヴィッドソンは強調している。

ジェファソンは、最近になって彼の伝記を書いたギルバート・チィナー
ドが述べているように、単に政府の形を整えることだけでなく、「本質的に
は農本主義的な形をもったひとつの文明の形態を保護して維持してゆくこ
と」にも関心を持っていたのである。この農本主義的形態は既にアメリカ
に存在していたとはいえ、イギリス帝国主義のもとで呻吟していたのであ
った—今日の南部と同じく、農業は否応なしに換金作物栽培と土壌の消尽
を招いてしまった。アメリカの独立は、新たな統治形態を確立するにとど
まらず、アメリカという特殊な条件に合致した、ヨーロッパ的状况での統
治の確立に手を貸したかもしれないような危険性など存在しない、そうし
た文明を作り上げる機会を提供したのである。(Davidson 329)

デイヴィッドソンが旧南部の価値観に立脚した農本主義を、1930年代とい
う大不況の時代の現実に適用しようとしたのは、北部中心の画一化されたインダ
ストリアリズムという価値観に、南部が飲み込まれるという恐怖に似た痛切な
認識が彼にあったからである。とりわけアメリカが国家的危機に瀕した1930
年代のデイヴィッドソンの発言は、アメリカ的価値観とは何かという根本的な
問いが基調になっていた。しかし、デイヴィッドソンが1930年代のアメリカに
復活させようとしたジェファソンの農本主義は、南北戦争前の旧南部農園制度
が奴隷制を前提として成立していた以上、根本的欠陥を有していたのである。
これが、ランサム、テイト、ウォーレンといった南部農本主義の主要なメンバ
ーがこのイデオロギーを捨てた理由のひとつであったらう。デイヴィッドソ
ンが北部インダストリアリズムを糾弾し旧南部の価値観を現在の南部に復活さ
せることを声高に説いていた反動的姿勢は、「過去は繰り返せない」という歴史
の現実を知った人物を描くアメリカ文学のひとつの系譜⁴に対立する以上、南
部農本主義に固執した彼が結果として周囲から孤立したのは当然であったとい
うほかはない。しかし、デイヴィッドソンはあくまでも南部にとどまり旧南部
的農本主義にあくまでも忠実な態度を貫いたがゆえに、彼の論文の主張をたど
ることは、1930年代の南部的価値観の具体的な姿を明らかにするのに非常に有
益である。孤塁を守り続けたデイヴィッドソンの反時代的主張には、20世紀に
おけるジェファソンの農本主義の運命という大きなテーマが内包されており、
その思想的限界を前提としつつデイヴィッドソンの文明批判を再検討する作業
は、アメリカ精神の根本を探るうえで有益であるといえよう。

註

- 1 ジェファソンは、農業共和国を理想とした思想を『ヴァージニア覚え書』で展開し、商取引を通じてアメリカは原料輸出国となり外国から製品を輸入する図式を描いていた。この点については、明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』第2章に詳しい。
- 2 Bingham 編によるアンソロジーに収められた論文“The Class Approach to Southern Problems”にセグリゲーションを肯定する主張がうかがわれる。
- 3 ウォーレンは、1939年の長篇小説 *Night Rider* で、農本主義のイデオロギーに加担して大資本からタバコ栽培農家を守ろうとした主人公のむなしい死を描いて、自身の農本主義からの訣別を宣言した。さらに、1953年（新版1979年）の長篇詩 *Brother to Dragons* で、ジェファソンを主要登場人物に設定し、その理想主義を作者の明らかなペルソナである語り手 RPW に激しく糾弾させている。
- 4 アメリカ文学に典型的な「自然と文明の対立」の問題については、Leo Marx の古典的研究を参照。「過去を繰り返す」ことが不可能であるという主題は、F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925) に明らかである。なお、ウォーレンの長篇小説 *All the King's Men* では、過去を繰り返そうとするのではなく、そこからの経験を糧に精神的成長を遂げた主人公が未来に向けて歩き出すという構図が提示される。

文献

- Agar, Herbert and Allen Tate. *Who Owns America?: A New Declaration of Independence*. 1936. Wilmington: ISI, 1999. Print.
- 明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念—アメリカ合衆国建国史序説』ミネルヴァ書房、1993年。Print.
- Bingham, Emily S. and Thomas A. Underwood. *The Southern Agrarians and the New Deal: Essays After I'll Take My Stand*. Charlottesville: UP of Virginia, 2001. Print.
- Conkin, Paul K. *The Southern Agrarians*. Knoxville: U of Tennessee P, 1988. Print.
- Davidson, Donald. *Regionalism and Nationalism in the United States: The Attack on Leviathan*. 1938. New Brunswick: Transaction, 1991. Print.
- フリードマン、ベンジャミン・M. 『経済成長とモラル』地主敏樹他訳。東洋経済新報社、2011年。Print.
- 井出義光、本間長世、大橋健三郎編『アメリカの南部』研究社、1973年。Print.
- Malvasi, Mark G. *The Unregenerate South: The Agrarian Thought of John Crowe Ransom, Allen Tate, and Donald Davidson*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1997. Print.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. New York: Oxford UP, 1964. Print.
- Murphy, Paul V. *The Rebuke of History: The Southern Agrarians and American Conservative Thought*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001. Print.
- Twelve Southerners. *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1930.

Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977. Print.

Winchell, Mark Royden. *Where No Flag Flies: Donald Davidson and the Southern Resistance*. Columbia: U of Missouri P, 2000. Print.